

ちば・谷津田フォーラム

里やまの自然誌



目次

施肥と無施肥の水田の環境・経済的解析 - 我孫子市「水田を活用した水質浄化モデル事業報告」から - 千葉県立中央博物館生態・環境研究部；我孫子市環境審議委員 中村 俊彦・我孫子市手賀沼課 石原 正規	1
千葉の田んぼの現状、一断面 日本雁を保護する会 荒尾 稔	3
ちば・谷津田フォーラム第8回シンポジウム 「谷津田フォーラム in 丸山町」報告 ぼんた里山の会代表 遠藤 イサム	6
スタッフとして参加して 江戸川大学 小西 朝希子	9
事務局より	11

題字：倉島貴浩（ワークホーム里山の仲間たち）

イラスト：松下優子

施肥と無施肥の水田の環境・経済的解析

- 我孫子市「水田を活用した水質浄化モデル事業報告」から -

千葉県立中央博物館生態・環境研究部；我孫子市環境審議委員 中村 俊彦・我孫子市手賀沼課 石原 正規

はじめに

同じ作物を同じ場所で毎年収穫できる耕地は、水田以外にはないと言われる。稲作は、本来、用水や土中の窒素やリンを効率良く吸収して米をつくり出す。したがって稲作自体は水質浄化に役立つはずである。しかし、単位面積あたりの収量最大化を目指した近代的稲作水田は、農薬や化学肥料を多量に使用するため、現在、河川や湖沼の水質汚染源にもなっている。

我孫子市は手賀沼の浄化対策検討の一つとして、2001年から3年間の予定で、水田を活用した水質浄化についての調査をおこなっている。これは、3つの水田で通常施肥、半量施肥、無施肥の試験栽培をおこない、米の収量とともに、施肥や窒素・リンの流入流出の等の実態調査から農法と水質との関係を明らかにしようとするもので、すでに2001年11月と2002年11月に報告書を作成している。今回は2002年11月の報告書に基づき、学術的な試験研究として条件が整えられている2年目の通常施肥と無施肥の水田調査の結果について、稲作の水質面での影響とともに米収量と米作コストの関係を解析し、両水田稲作の環境また経済的な評価を試みたものである。

調査方法

調査は、我孫子市上沼田地先の手賀沼干拓地の水田において、通常施肥水田(3.1反)と無施肥水田(3.3反)を設定した。両水田とも、2000年までは農薬空散を含む通常施肥の慣行農法の稲作がおこなわれており、毎年ほぼ500kg/反前後の収量であった。今回の通常施肥田での稲作はこれを継承し、2002年4月の元肥と7月の追肥合わせて化成肥料36kg(窒素3.9kg,リン208kg)/反を使用し、畦雑草処理を含め4回の除草剤散布を施した。一方、無施肥水田は、施肥は無く、除草剤散布も5月に1回だけである。なお両水田ともに品種はコシヒカリであり、農薬空散を施し、手賀沼からの用水をパイプラインで引き、暗渠排水している。2002年は両田とも、4月下旬に水張り、代かき、5月初旬に田植え、6月から7月にかけて約1ヶ月の中干し、9月中旬に稲刈りした。

灌水期間中、2つの水田の水質、水量、土壌、米収量調査を実施した。水質調査は、用水流入口、流出口、田中央付近、暗渠排水口の4ヶ所において田植え前から収穫前までの約2週間おきに8回採取し、その全窒素、全リン等について測定した。ただし両水田とも節水型の水管理のため流出水が無い場合もあり、この場合は流出口付近のたまり水による代替データとした。水量は、流入口と流出口に水位計を設置し、全期間において30分間隔の連続観測による水量測定をおこなった。米収量調査は、玄米の収穫重量および稲藁重量の他、収穫前に穂数、もみ数、登熟歩合、千粒重量の調査ならびに農家からの聞き取り調査をおこなった。

今回の水量調査および気象庁雨量データ等から水田で水収支を推測し、さらにこの水収支推定結果と水質調査結果から窒素およびリンの流入・流出量について推測した。

結果

全期間の用水の流入量は、施肥田 $986\text{m}^3/\text{反}$ 無施肥田 $354\text{m}^3/\text{反}$ であり、表面流失量はそれぞれ $322\text{m}^3/\text{反}$ 、 $113\text{m}^3/\text{反}$ であった。両田ともに降水量と蒸発散量は $463\text{m}^3/\text{反}$ 、 $496\text{m}^3/\text{反}$ と見積もられ、したがって地下浸透量は施肥田 $631\text{m}^3/\text{反}$ 、無施肥田 $208\text{m}^3/\text{反}$ と推測された。

玄米収量は施肥田が $480\text{kg}/\text{反}$ 、無施肥田では $426\text{kg}/\text{反}$ と約1割の減収であった。この両田の違いは、 1m^2 の穂数によるもので、施肥田が 568 穂/ m^2 、無施肥田 520 穂/ m^2 であり、もみ数、登熟歩合、千粒重量についてはむしろ無施肥田の値が大きかった。ただ 1m^2 当たりのわら重量は施肥田が $1,056\text{g}/\text{m}^2$ に対し、無施肥田では $905\text{g}/\text{m}^2$ と少なかった。

水質・水量から両田の窒素とリンの出入りを推測したところ、リンは施肥田、無施肥ともに流出が流入を上まわっていた。一方、窒素については、施肥田では流出が流入を $1.01\text{kg}/\text{反}$ ($10.0\text{kg}/\text{ha}$)上まわっていたが、無施肥田では、流出が流入を $0.46\text{kg}/\text{反}$ ($4.56\text{kg}/\text{ha}$)下まわり、窒素浄化を示した(図1)。

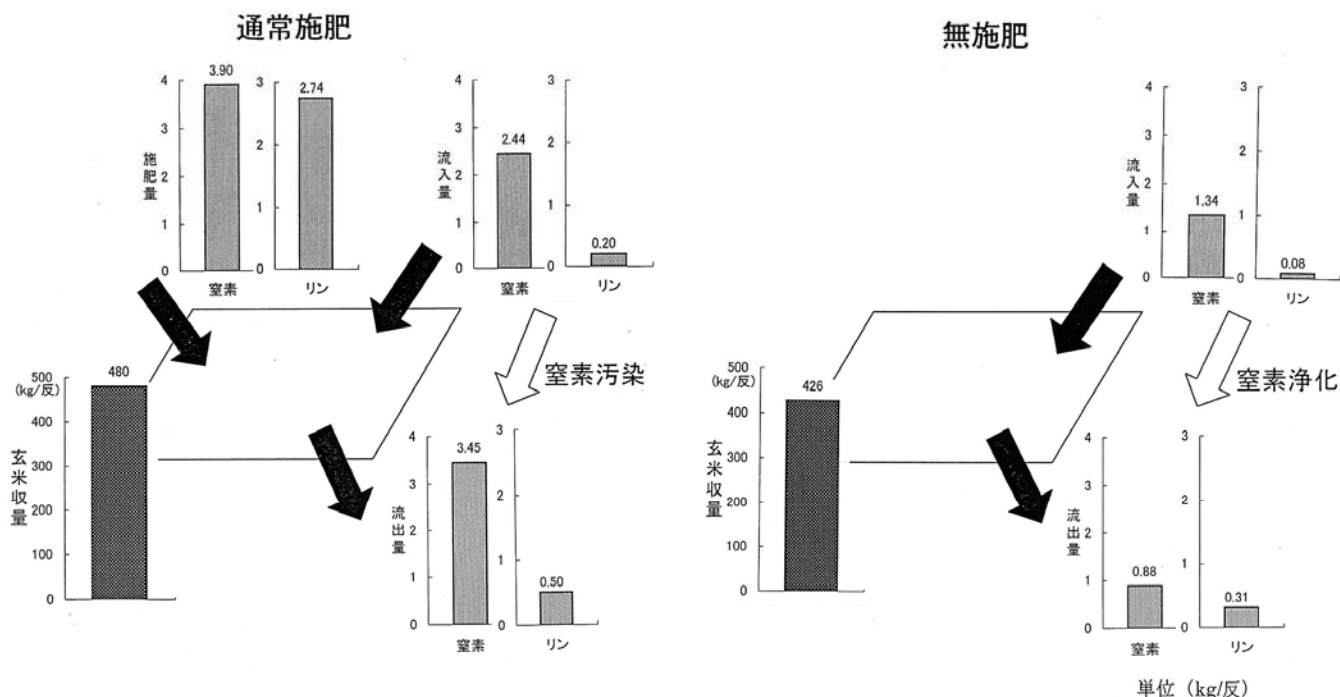


図1. 通常施肥田と無施肥田の玄米収量と窒素およびリンの流入と流出(2002年4月~8月)
我孫子市委託報告書(2002年11月)より.

考察

< 経済性と水質浄化機能を兼ね備えた無施肥田！ >

水田稲作における今回の通常施肥と無施肥の違いは玄米 50kg であった。この差は金額にすると約 12,150 円 (225 円 X 54kg) になる。しかし、通常施肥の場合の施肥費用は手間賃も含めると約 8,200 円/反 (肥料代 20kg 袋 1,600 円 X 2 袋 + 作業賃金 5,000 円) と見積もられ、したがって通常施肥は無施肥に比べ約 3,950 円/反の収入増となる状況である。しかし、通常施肥田では、無施肥田に比べ 3 回増の除草剤散布が施されており、この手間賃を仮に各回 2,500 円と見積もると、無施肥田の方が 3,550 円増収入となる。また、用排水の窒素の動態調査の結果から、通常施肥田は窒素汚染源であるのに対し、無施肥田では窒素浄化の機能があり、環境面での無施肥田の価値は明らかである。もちろん無施肥田の収穫量等がこの状況で今後とも持続するかはさらなる調査解析にゆだねられるが、今回の結果は予想外であった。

施肥にしろ無施肥にしろ今回の節水型稲作は最小限の用水利用の結果である。もし窒素、リンを含む用水をさらに多く利用した稲作が展開されれば、米収量の増加および水質浄化機能の増大も期待できる。

田淵(1998)によれば、水田の窒素除去機能は濃度が高いほど大きく、1日当たり 1kg/ha となり、灌漑期 100 日では 100kg/ha の窒素浄化の機能を有するとも見積もられている。また特に湧水で灌水が途絶えない谷津田では稲作期間の窒素除去は 830kg/ha にも達するとのことである。さらに谷津田休耕田の雑草区では、この除去率が一層増大することを報告している。

尾崎・近藤(1995)によれば窒素除去の水質浄化の機能は非作付期の水田でも発揮される。そして、この水田に稲わらを施用した状態ではその効果が一層高まることも示されている。土地改良による水田の乾田化は水生・湿生生物に大きなダメージを及ぼしているが、最近、一度乾田化した水田に冬期に水を張り、ミズや他の水生動物の力を借りて、水田土壌を肥沃にし、化学肥料や農薬も使用しない不耕起の稲作がはじめられている(岩澤, 2003)。この冬期湛水不耕起の稲作は岩澤農法ともよばれ、すでに無農薬化および生物多様性の保全・復元に対する効果が示されているが、水質浄化にも大きな期待がもたれる。

おわりに

昨年、農水省は 2005 年度から、減農薬・減肥料等による生態系や水質の面で環境保全型農業をおこなう農家へ直接支払いの補助金制度を導入する方針を決定した(2003年11月6日朝日新聞)。この決定は、ある意味では多くの関係者が待ち望んでいた日本農業の大きな転換点ともなりうる決定といえるものである。今後この決定をより効果的に現場展開する為にも、水田農業と自然環境の関係についてはより一層の調査研究が必要であり、さらにその研究成果が多くの関係者に共有され、そして農家・農業の現場へ還元されなければならない。

文献

我孫子市・国土環境株式会社. 2002. 平成14年度水田を活用した水質浄化モデル事業調査委託報告書. pp84+151, 我孫子市.

岩淵俊雄. 1998. 水田の浄化機能を中心とした地形連鎖システム. 農水省・国土庁・環境庁・日本学会関係研究連絡委員会(監), 農業・農村と環境. pp84-88. 養賢堂.

岩澤信夫. 2003. 不耕起でよみがえる. 271pp. 創森社.

尾崎保夫・近藤正. 1995. 自然浄化機能を活用した農山村地域の水質改善. 用水と廃水37(1):32-38.

千葉の田んぼの現状、一断面

日本雁を保護する会 荒尾 稔

この1月11日に、千葉県我孫子市より、成田を經由して、佐原市までJRで移動しました。

広大な田んぼが、見事と言っていいほど見渡す限り、全域乾田化されています。風景全体が茶色に染まって、心にぐさっとくる一面の灰色の世界と言って良いでしょう。現実問題、たまに、田んぼ1枚に一面に水が張ってある箇所がありました。それだけで気持ちがホットします。

ところがよく見るとこれが、鴨を捕獲するための冬期湛水水田なのです。無双網と言って、くず米を撒いておいて、夜間鴨を一網打尽に捕獲する仕組みです。しかもこれが、JRの車内から3ヶ所も望見されました。でもこの狩猟方法は合法です。

また、成田線で成田周辺の里山の放置された結果の荒れ方を見るに付けて、里山全体が醸し出す雰囲気もこの風景の影響で、このような場所で育つ子供達の乾ききった心のひだを感じられる様です。

田んぼの乾田化→砂漠化から、冬・水・田んぼ(冬期湛水水田)化

を言うまえに、実は子供達の心もが乾燥化しているのではないかと、考えたりします。子供を産む前の娘さんや若い母親達の気持ちも知りたいところです。

現状の田んぼの乾田化とは、想像を絶した現実を引き起こしています。田んぼの畠化でもあり、真の砂漠化です。年間8ヶ月間は、ゴビ砂漠、ナビブ砂漠と同様、それ以上に過酷な無生物の世界です。実



乾田化した田んぼは砂漠と同様、それ以上に過酷な無生物の世界だ

質、無菌状態で、細菌も生きられないといわれます。生態系ではゼロとなります。

我々の若いときは四季の潤いと、緑と水に満ちあふれていました。いまの子ども達はナビブ砂漠と同じように、1年間のうちの8ヶ月は田んぼ砂漠を見て育っているのだと。心証風景は、砂漠で育つ子ども達と同じなどだと、はっと考えます。さらに、手入れされずに荒れ放題の里山。想像すらしなかった世界を我々は子ども達に残すことになってしまったのだと自責の念にかられます。

今の日本の田んぼでの農法は、慣例農法と言われ、全国一律に近く春、一斉に田んぼの蛇口を開けて、パイプで供給される水を張り、農薬と肥料を大量に投入し、しろかきをします。その上で、連休中の休みを利用して田植え、後は、空中散布で、混合農薬を散布します。子ども達への3種混合ワクチンの危険性で大問題になった、薬品の相互干渉による毒性が心配されているまま、千葉県では今も大々的に使われています。この農薬は、空中散布ですからあらゆる箇所にまんべんなく行き渡ります。従って、その毒性は生き物に有効なだけでなく、生態系全部に影響を与えています。

秋の収穫まで基本的にはそのまま、ほとんど田んぼにはいることもなく、すべき仕事がありません。農家の方々はほとんど仕事が必要ないのです。その上で、ベンツと揶揄される、1年に4~5日しか稼働しない高価なコンバインで刈り取りをし収穫し、販売業者へ引き渡します。

誰でもできる農法が理想となって、田んぼを見て廻ることもほとんどない生活です。従って、いままで1000年以上も継続してきた、農業を両親の働く場として実体験する機会を持たないままです。農家の息子達は普段はJA職員や公務員となって、しかも農業は専業ではなく兼業として存在し、家族単位では、両方からの所得を得られる仕組みとなっています。

でも、現状の慣例農法とは、まるでインスタントラーメンをお湯を沸かして作って食べるみたいに聞こえてしまいます。砂漠のままの状態から、生態系ゼロからの急激な稲作のスタートですから、何から何まで農薬、肥料等無機化学製品を多用することになります。これらが、一斉大量に供給されるために自然界で排除しにくく、湖沼等での富栄養化の大きな原因の一つともなります。

同時に、農家の方々自身への農薬の影響、特に年を取ってからの重度の農薬障害の発生がいろいろな病気となって身体をむしばみ、専門家は警告を発しています。同時に、またそれら、このような生産手法で作られる米を食する日本の市民達、特に子供達への影響がアトピーの多発などをはじめとして、もっともっと真剣に心配する必要があると思います。それらの結果を踏まえて考えると日本の原点はあくまで農業国であり、2500年以上同じでした。

生き物達は日本の田んぼの耕作スケジュールを熟知していて、それに合わせて年間でのタイムスケジュールを組み立ててきています。タイコウウチも、メダカも、秋の借り入れ前になると田んぼの水が切られますので、田んぼ横の用水か、羽を使って付近のため池へ移動します。

ナビブ、ゴビ砂漠では、数千年から1億年以上の経過がありますので生態系もそれなりに適応できています。日本の田んぼの砂漠化は、まだ始まって40年。この短い期間ではあらゆる生き物が適応できません。そのために、メダカなどまでが絶滅の恐れがあるという現実を招いています。昭和40年代初め、田んぼの砂漠化が始まったときに、雁、トキをはじめ、それぞれの高等動物は一斉に姿を消しました。移動性の高い雁・鴨・白鳥達は、生活適応できないとして、渡来しなくなったのです。

生態系でいえば、生き物の頂点にたつ、高等動物としての我々に影響がでないとは、考えられません。生き物としての生態系としての回転率が違うのです。

田んぼの環境が、ナビブ砂漠並みになれば、子供達の知る原風景がまったく変わってしまいます。子供達の心のひだに、田んぼの砂漠化がどのように反映しているのか。荒廃した里山の風景が、二重写しになってどのように写っているのでしょうか。

戦後のこの50年間、人の一生と重ねてみて、我々の周辺には、きちんと永年引き継いできた日本の基本的な農法・里山管理法を放棄してしまった結果。我々古い世代には、しっかりと植え込まれているものの考え方が崩れてしまいました。特に農業が基本であるべき技法が失われて、自然と接点を切り離してしまった結果、ひよろひよろで手入れがされていない、砂漠のように無感動な、生きるすべも知らない無力な若者がたくさん産み出されているのではないのでしょうか。山武杉のクローン技術で産み出された欠陥と、戦後教育での結果とがオーバーラップにならないければ良いのですが。

農家にとって、自分の息子や孫との関係でいえば、農家の親の作った米や野菜までも、農薬汚染を心配して若い世代は食材とすることを断りだしていると聞いています。安心を求め、スーパーで野菜や真空パック入りの餅や求めるような有様だと聞いています。

すべて、我々の世代がここ 50 年間で到達した結果です。責任を負って後継者や孫達に、なんとか自然再生、自然創世をして戻してあげる義務があると、強く感じています。

農家の皆様にまずご提言です。

まず、真っ先に、自分の田んぼに水を張ってみてください。従前の農法から地域ごとの、伝承された農法を再度見直してください。先ほどの、印旛郡栄町の新海さんは、冬・水・田んぼ（冬期湛水水田）でなにが一番変わったかと聞くと、自分だと。毎日何度も田んぼを見回りに行くと、楽しくてしょうがないと。

生き物が身近にあふれ出すと、気分が晴れます。冬・水・田んぼは、かつて当たり前の農法であったと言うことに気が付いたとのこと。新海さんは、本年は特別な思いで、全く新しい農法にチャレンジする事に決めたとのことでした。同時に、ささやかでもロマンを感じてください。

里山の生物指標の一つとして、田んぼの生物指標としては、雁・鴨・白鳥だと思います。現在、新海さんの冬期湛水水田には、白鳥も 38 羽。雁も来ました。タゲリという渡りをするシギも多数渡来していました。ハヤブサというどう猛な大型の鷹も来ています。河川には鮭の遡上と産卵、孵化→太平洋からの回帰の回復があると思います。

2004 年 1 月 11 日 千葉県栄町の新海さんの冬期湛水水田を開始した田んぼ横で、飛び越えられる幅の素堀の用水で、たった 200m の距離に、平均 80 cm の鮭のほっちゃれを 4 頭も発見、写真を撮りました。（<http://210.255.173.147/tml/shinkaitanbo.htm>）

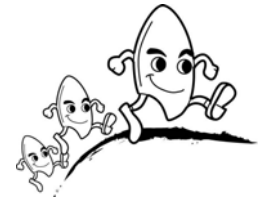


冬期湛水水田下の用水まで溯上・産卵したサケ(ほっちゃれ)2004.1.11

どのくらいの個体数が、この流域に遡上してきたか不明です。ただ、印旛沼では、川に仕掛けられた網が、破られる寸前までのかってない大量個体の鮭が遡上してきたとのこと。里山の一つの指標として、鮭は重要だと思います。

(荒尾 稔 tmlara@tml.co.jp)

第8回ちば・谷津田フォーラムシンポジウム 「谷津田フォーラム in 丸山町」報告



ぼんた里やまの会代表 遠藤 イサム

昨年11月23日(日)・24日(祝)南房総(千葉県安房郡丸山町のシェークスピアカントリーパーク・シアターホール)で「谷津田フォーラム in 丸山町」と称しシンポジウム(主催:ちば・谷津田フォーラム, ぼんた里やまの会, 後援:丸山町, 地元安馬谷里山研究会, NPO法人ちば環境情報センター, 協力:日本財団)を開催しました。

23日は、安馬谷、三島地区にかけてのフィールドを、雑木林コース(参加者16名)・たんぼコース(参加者17名)・海辺のコース(参加者13名)計46名、それぞれ班ごとに分かれて見学しました。雑木林、たんぼコースは、地元、安馬谷里山研究会のメンバーに案内していただき、海辺のコースは、河口から海岸(砂浜)・植生・防風林と散策し、地元の大川さんより三島神社・半農半漁のころの地引網など、生活文化にかかわる話を聞きました。夕方の懇親会までの間、各班にて良かった点(青)、悪かった点(赤)など感じたことを地図上にマーキングし、まとめていただきました。

懇親会(農産物交流センターにて)には、見学会に参加しなかった地元の方々も参加していただき、地元の料理(鯨の勝田揚げ・落花生・地酒・など)を囲んで有意義な交流が出来たと思っています。

2日目は、シアターホールにてシンポジウムを開会しました。丸山町行政からの報告(取り組み・ビジョン)を丸山町役場小宮企画課長さんよりしていただきました。その後、地元の活動報告として

①歓迎の踊り(小野派の心・その他)を保存会の方々

②安馬谷里山研究会(代表横山武さん)より安馬谷町有地12ヘクタールの維持管理の活動報告

③丸山町大井地区で取り組んでいる「いきいき館」の代表朝倉さんより、体験学習・(牛の乳しぼり・ジャムづくり・イチゴ狩り・など)農産物販売を通じて地域と都市との交流を図っている報告がなされました。また、

④地元県立安房農業高等学校(飯島政義教諭)の生徒たちからクレソンを使った水質浄化の研究発表がなされました。



谷津田フォーラム in 丸山町開会宣言(2003年11月23日)



会場のシェークスピアカントリーパーク・シアターホールと参加者



初日は海岸, 田んぼ, 雑木林コ・スに分かれて丸山の町歩き

⑤ぼんた里やまの会からは、谷津田・雑木林・ため池など、保全するには生活との関係が必要であると報告がありました。

そして、「丸山町の良さ・価値の発見と再確認」をテーマにフィールド見学で気付いた点、今後の提案など、各班で発表（雑木林・たんぼ・海辺）していただきました。

午後は、「ちば・谷津田フォーラム」代表でもある、県立中央博物館の中村俊彦さんによる「里やま・里うみ・と丸山町」をテーマに、千葉県 of 地理的現状から丸山町の地理的現状・雑木林・谷津



夜は歩いたコースの良い所、悪い所の検討(田んぼコース班)



2日目は地元での活動報告(安房農業高校)

田・海辺と、つながりの必要性など、話をしていただきました。そして、パネディスカッションに入り、コーディネーターは、ちば・谷津田フォーラムの川本幸立さん、特別講師として中村俊彦さん、ちば・谷津田フォーラムの小西由希子さん、地元参加者は、丸山町役場の小宮企画課長、有機農業に20年以上取り組んでいる八代利之さん、安馬谷里山研究会の横山武さん、高齢でありながらもまだまだ現役で農業をしている遠藤まちさん、参加者、それぞれの方たちから、各班で発表した内容や、地域の現状・課題・について多くの気付きを与えていただき、新たな展開の期待を込めて無事閉会しました。

(シンポジウムの様子は、ちば・谷津田フォーラムホームページ <http://yatsuda2.protok2.com/> に掲載中です)



前日の町歩きの結果発表(雑木林コース班)

パネルディスカッションの要旨

パネラー：遠藤まち氏（町民代表）、八代利之氏（農業者代表）、横山武氏（安馬谷里山研究会代表）、小宮氏（丸山町企画課長）、小西由希子（NPO 法人ちば環境情報センター代表）、中村俊彦氏（ちば・谷津田フォーラム代表）

コーディネーター：川本幸立氏

川本：生命の循環がポイントである。地方が主役になる時代がやってきた。今日は丸山町のよさを率直に語ってもらおうと思います。

八代：30年前から有機農法をやり始め、今は100%有機農法になった。生産者の顔の見える農作物の生産を志している。

遠藤：丸山町の海岸の砂療法で自分の体に効果があった。膝が痛い時に毒素をとってくれたからでしょう。びわの葉も良い。自然療法が良い。

小西：この日の計画をずっと前からしてきて、この日が来てドキドキしていた。

小宮：(先行する中村俊彦氏のトキ・うなぎ・海亀構想に呼応して) 丸山町もトキを誘致したい。ここでは生産の場がないので財源も少ない。丸山町で育って都会に出てそこで税金を納めている。丸山町の財源は60%地方交付税でまかなわれているのが現状である。役所主導が多いし、住民もそれを期待している傾向にある。自分達で自分達の町を管理していくのがいいのではなかろうかと考えている。市町村合併で予算のとられにくい自然保護が心配である。



横山：雑木林グループの発表の一部「雑木林につばきやアカシアは合わない」に対して、「切り倒したのは、昔のようなゆりが咲く雑木林にしたかったからです」。三面張りのコンクリート水路は土砂で詰まり、それを出すのに人手がかかるからです。牛糞も今後は臭い対策に厳しくしなくてはならない。

遠藤：古い庚申塚をよその方が気づいてくれてどうもありがとう。古いのは手入れに手が回らない。

小西：谷津田奥の道がコンクリート道になって、昔はそこまで背負って歩いていたのが、改善されたとお聞きしました。お互いにそれぞれの見方があることがわかったのが収穫です。出会う勇気が大切です。

八代：今後の農業について、拡大農林をやっていたが、自分の健康が大切だと思い、その仲間が集まり、有機農法をやり始めた。「複合汚染」の(書籍が出版された)頃、需要が伸び、配達もした。ゴルフ場が建設されると聞いて、130人で一坪運動をした。現在80種の農産物を生産しているが、トマトなどがむずかしいが、自然循環を最終目標にしており、それをやり遂げる信念が必要である。有機農法の利点は地域の方々がよくなるのが最近わかったということです。環境を守るのが目標でそれを理解してくれる人が必要である。今何ができるかを常に考えて前進しようとしています。



会場からも活発な意見が飛びだす

小宮：今までの生産という観点で見えてはいけない。ガーデニングツリー21プランではR410と丸山川が町の中央を幹のように流れており、丸山川ネットワークゾーン交流について考えている。果実の成る木を植る提案には21集落のうち7つが体験できるように遊休地を使いながら植えている。お互いに助け合う「結」の制度が皆忙しくて廃れたが、植える作業を通じて昔の助け合いを戻そうと思っている。市町村の合併となればこのプロジェクトは立ち消えるかもしれない。

横山：丸山町の他の魅力についてごはん1膳の価格は28円で、缶ジュースは120円、エビの35%は輸入されており、片方で成人病が心配である。昭和30年の新潟の食事が一番栄養のバランスがとれていた。都会の方が(谷津田や里山の)保全にあこがれるのは、原点に帰りたいからではないかと思っています。350人の会員がいる「自由時間クラブ」に来てほしいなあと思っている。

遠藤：農研や青年団もあり活動していたが、おこごみなどの行事もなくなり横のつながりが無くなってきた。部落でも隣が何をしているかわからない。ここも都市化しているのかと思う。

川本：地方でもコミュニティの喪失が進んでいるのですね。それでは市民とNPOの関係について小西氏に語っていただきます。

小西：自然の持つ力が私達に感動を与えてくれました。一人では田んぼも歩けないし、一つしか見つけられないかもしれないが、皆で歩くと多くの発見ができました。皆の力を信じて行くのが大事だと思います。又それが力となってきます。

中村：活動では多様性が大事である。生産性も多様性があると長く続く。生きる原点とは食べ物・健康・充実感である。千葉には飢餓の歴史がないくらい、自然から恩恵を受けてきた。昔の方は自然を壊すとどうなるか知っていた。未来のことを考えることが原点となる。町内のアンケートに農家民宿をしたい方が20人いらっしやった。期待したいと思う。



会場からの意見に真剣に耳を傾けるパネラー

<ぼんた里やまの会からの提案>

たくさんの気付きの中から私たちが必要としている要素を少し整理してみました。

- ◆人の手が関わることの出来ない空間は、自然で美しい。
例・河口付近で河川が流動している形状。
- ◆自然で美しいものに、“ほっと”するものを感じる。例・営みの中で人の手の加わった機能的なもの。オダ掛け・掛け干し・わらぼち・わら塚・境界木・オダ掛けなどの材料置き場・山裾の緩やかに曲がった農道(里道)等。
- ◆好奇心(珍しいもの)・地域ならではの・・・掘り所を感じる(風車・ハツタケ・松露・砂風呂・地引網・イグサの栽培・食べ物など)
- ◆歴史・生活文化には、興味があり必要性を感じる。(綱つり・庚申講・八幡神社・三島神社・福正院・四季の行事・など)
- ◆山野草・照葉樹林(スタジイ・マテバシイ・ヤブツバキ・ヤマモモ・カシ・ユズリハなど)砂浜の植生などに伴う生物の生息環境が豊か。



雑木林コース班のまとめ

これらの要素は、農の近代化になる前は、農の営みの中で意識しなくても結果として成立していました。近代化によって、生産効率は良くなったのですが負の遺産を多く残しています。今回のシンポジウムによって、近代化で失われた生活文化や歴史・自然・景観・地域性(掘り所性)などを再認識する機会を与えてくれた事に感謝しています。今後、地域の活動・会の活動に活かしたいと思います。

スタッフとして参加して

江戸川大学 小西 朝希子

2003年11月23～24日に『谷津田フォーラム in 丸山町』が実施された。会場である丸山町は豊かな里やまや谷津田が多く残っているところである。

私が丸山町を訪れたのはこのイベントの下見と当日を含め3回しかない。一度は高校時代家族旅行で

丸山町内にあるローズマリー公園を訪れたときである。家族旅行では、ただの観光客という目でしかみていなかったが、谷津田に関心を持つようになり、あらためて丸山町の自然をみると、その自然のすばらしさに感動した。そして、丸山町の谷津田保全に協力したいと考えるようになった。

丸山町では、その貴重な自然を守りながら、過疎化した町の町おこしのため、谷津田をどう生かしていくか、地元の人と外からきた人（丸山町外の人）が一緒に「町歩き」をし、議論を重ねて協力して保全・生かしていく方法を提案した。この「町歩き」は、雑木林・田んぼ・海辺の3コースにわかれて丸山町内を歩き、いいところや気になるところをチェックしていき、班でまとめ発表するものである。この方法は、一見すると地元のことを何も知らない都会の人が言いたい放題に勝手なことを言っているように思われがちだが、同じ町を同時に違う立場の目線で見ることにより多くの発見があった。

「丸山町に住む人と町外から来た人では、谷津田を含む町に残る自然への見方・価値観が異なる」であろうという考えのもと『谷津田フォーラム in 丸山町』は、準備がすすめられた。私は準備の段階からこのイベントに参加した。このイベントは、地元の里山保全団体



三嶋神社では地元の大川さんに故事を伺った



発見した丸山町のいい所、悪いところを地図上に落とす



海岸コース班の成果発表

とちば・谷津田フォーラムが協力することで実現した。数ヶ月前から話し合いを重ね、互いのスタッフが一同に会して一泊二日の下見もおこなった。地元の人と町外からの目で丸山町を見て、丸山町の良さや価値を再発見することにした。その方法の1つとしてまずは町歩きをおこなった。「町歩き」は、雑木林・田んぼ・海辺の3コースにわかれて丸山町内を歩き、いいところや気になるところをチェックしていき、班でまとめ発表した。

Φ丸山町エコツアー「春の里やま散策と食菜」

雑木林・ため池・谷津田・鎮守の森と、春の里やまを歩き、野草・樹木の芽吹きを感じながら、身近にある野菜で食事をしませんか？

日時： 2004年4月3日(土)13:00～4日(日)15:00 1泊2日

場所： 安房郡丸山町安馬谷地区の谷津田・溜め池・雑木林など

宿泊先： 農業体験施設 遊農倶楽部「海のアトリエ」

安房郡丸山町白子三島 2780-1 Tel. 0470-46-3225

チェックイン： 4月3日13時 **チェックアウト：** 4月4日15時

参加宿泊費： 3,000円(1泊2食付き,消費税込)

定員人数： 10人～20人

申し込み先： 遠藤イサム Tel.090-5515-2455

E-mail: youknow@k8.dion.ne.jp, HP: http://www.geocities.co.jp/NatureLand/7657

主催： ぼんた里やまの会



丸山町の溜め池

<事務局より>

ご寄付くださった方々

会誌9号発行以降、次の方々から合計金額 77,500 円のご寄付をいただきました。紙面を借りてご報告いたしますとともに厚く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。(2004. 1.22 現在, 50 音順・敬称略)

池堂純枝, 上村明子, 梅里之朗, 大沢昌子, 川島真弓, 黒田利行, 越川重治, 佐藤広史, 渋谷孝子, 嶋津雅照, 高橋在久, 高橋勇夫, 田中利彦, 外川仁, 仲野昭義, 成岡茂, 二瓶栄子, 原一民, 細矢忠資, 丸野眞樹子, 山田昌之, 渡辺英二

【ご寄付のお願い】

会誌9号発行から3ヶ月余という短期間の間に、今回も多くの方からご寄付をいただきました。前号でもご連絡いたしました。ちば・谷津田フォーラムの運営費は、会員の皆様の寄付と助成金でまかなわれています。会の運営のため、今後とも引き続きご寄付いただきたくお願い申し上げます。

郵便振り込み口座番号：00120-0-187874 ちば・谷津田フォーラム

【原稿のお願い】

会誌に掲載する原稿を募集しています。谷津田保全に関する活動紹介や、多くの皆さんに知ってほしいことなど、投稿してください。原稿は、フロッピーか e-mail でいただけるとありがたいです。郵送の場合は下記の事務所へ、e-mail の場合は、次のアドレスにお願いいたします。

原稿送り先 (e-mail の場合) : QYK16306@nifty.ne.jp (田中)

顧問 (敬称略・50 音順)

石川 清 (社会貢献活動企業推進協議会代表)

岩瀬 徹 (千葉県生物学会副会長・千葉県立中央博物館友の会会長)

大沢雅彦 (東京大学大学院新領域創成科学研究科教授)

楠岡 巖 (四街道ユネスコ協会会長・四街道ライオンズクラブチャーターメンバー)

ケビン・ショート (東京情報大学教授、博物学・自然史ライター)

椎名益男 (ライオンズクラブ国際協会 (千葉県) 環境保全委員長)

高橋在久 (東京湾学会理事長)

中嶋拓子 (千葉県生活協同組合連合会顧問)

根本正之 (東京農業大学地域環境科学部教授)

組織・運営

- ・代表：中村俊彦 (千葉県立中央博物館)
 - ・副代表：岩田好宏 (千葉県自然保護連合副代表), 原慶太郎 (東京情報大学教授)
 - ・事務局長：川本幸立
 - ・会計：小西由希子
 - ・編集：田中正彦, 小西由希子, 松下優子
 - ・幹事：調査研究・教育普及 (田中正彦, 栗原裕治, 小川かほる, 小西由希子, 網代春男, 高山邦明, 中村彰宏)
- 保全活動 (大槻憲昭, 中野雅藏, 高山齊一郎)



ちば・谷津田フォーラム会誌「里やまの自然誌」第10号

発行日：2004年2月1日

発行：ちば・谷津田フォーラム 〒260-0013 千葉県千葉市中央区 3-13-17 代表 中村 俊彦

TEL&FAX 043-223-7807 HP : <http://yatsuda.2.pro.tok2.com/>

編集責任者：田中 正彦, 小西 由希子 イラスト：松下 優子

郵便振り込み口座番号：00120-0-187874 ちば・谷津田フォーラム